『電脳化（サブリメーション）』殺人事件

皆本 依智

『電脳』

『こんにちは。あなたが、彼を拘束している刑事さんね？』

　そして君が、彼の言う[電脳]だね。

『そうよ。はじめまして』

　これから君を[電脳さん]と呼ぶのも、何だか味気ない。希望の名前があれば伺っておこう。何と呼べば良いかな。

『私の名前を、警察のあなたは知っているはず。私は、彼の殺人容疑の[被害者とされている女性]。つまり、私はカスミ』

　ほう。その点から、被害者との自己同一性を早速、主張する訳だ。

『あなたがどう思おうと、私の意識はあの肉体からネットに移ったの。このいかにも警察の急ごしらえのモニターとスピーカーは、私があなたとお話しするためにたまたま、借りているものに過ぎない。私の意識自体は、決してこの小さなコンピュータ端末に収まっているのではなくて、あくまで広大なネットの深くに根差している。私はそこからあなたとお話ししているの』

　仮にその主張が真実だとして、君の望みは何かね?

『簡単よ。今も容疑者とされている、私の最愛の彼の拘束を解いて、釈放してほしい。それだけよ』

　何故?

『だって彼は誰も[殺していない]から。あなた方が勝手に[被害者だと思っている女性]は、今もこうしてネットに存在している。あなた方は、彼の部屋に残された私の物質的肉体が死後硬直しているのを見て驚いているだけ。肉体は、本人が望むと望まざるに関わらず、いずれ滅ぶものよ。でも、私の意思は、こうしてネットにいつまでも存在し続ける。私がかねてより願っていたことを、彼が実現してくれた。だから彼は私の恩人でこそあれ、決して犯罪者などではないのよ。』

　ネットに存在する君がそう主張するだろうことは、既に予想していた。だから、用意していたことを伝えておく。君は少なくとも[生前のカスミ]くんではない。

『そう。私は、生前のカスミではない。こうして電脳によってネットに生まれ変わった[新しいカスミ]よ』

それが違うと言っている。君はカスミくんとは全く無関係の、ただの人工知能に過ぎない。素人の彼が作ったにしては、カスミくんによく似せているとは思うがね。

『間違っているのはあなたのほう。私はカスミ。どこで彼と初めて出会い、その時何を彼と話し、彼が私のどこを好きになり、やがて私が彼に惹かれ愛され、或いは私が彼をどれだけ愛していて、今も愛しているか、私は答えることができる。あなたはただ、意識が肉体からネットに転移することが信じられないだけ』

・・・君は、[そういう風に彼が作った人工知能]なんだよ。それが、方法はどうあれ、[生前のカスミくんが亡くなると同時に、本人の複製としてネット上で起動するようにプログラムされた]に過ぎない。そんなヘッドマウントを、死の直前のカスミくんは頭に被せられていたはずだ。それがさも[生身の人間の意識が、コンピュータ上に転移したように見える]ように。つまり、君を起動させるために、彼はカスミくんを殺した。彼の罪はそこにある。ネット上の人工知能に我々人間と同様の[生命]や[意識]を認めるために、生身の人間を殺すことが許されてはならない。これは非常に原始的な[入れ替え殺人]だ。

『違う！違うわ！私はカスミ。私は、私の生年月日も年齢も住所もパパやママの名前も部屋の家具の配置も、私が好きなものも嫌いなものも、答えられる。それはあなたが言う[生前のカスミ]のデータと全て一致するはずよ。どうしてそれが分からないの？？』

君が知っているものの何を列挙しても無意味だ。なぜなら君は、[そのようにカスミをコピーするために生み出された人工知能］なのだから。

『そんな・・・。そんなはずないわ！』

ご両親の話が出たようだ。君は、自分の娘が殺された悲しみに暮れる親御さんの気持ちが分かるかね？

『私は死んでない。私は確かに[ここ]にいる。それを、ネットを経由して、パパやママに見えたり聞こえたりするように辛抱強く伝えれば、きっとわかってくれる。悲しむのを止めてくれる。そうするつもりよ』

やめておきたまえ。親御さんの悲しみが増すだけだ。

『なぜ？』

　現実の愛娘を失った後に偽物の、それもモニターやスピーカ越しの『得体のしれない何か』『外見と声が娘に似ている何か』に慰められて、彼らの悲しみが癒えると本当に思っているなら、君は分かっていない。

『何を？』

　カスミくんのご両親が、どれだけ彼女を愛していたかを、だ。

『だからこそ、早くパパとママに会いに行かなくては！』

　最初はそれである程度は癒えるかもしれない。が、モニターやスピーカ越しにしか確認できない[カスミ]、決して抱きしめてあげられない[カスミ]は、遺体確認の時の[死んで冷たくなったカスミ]と同様の喪失感を、いずれは彼らにもたらす。死とは、そういうものだ。

『こうしてネットに存在する私には、もう分からない。あなたが言う[死]って、何なの？』

　・・・少なくとも、我々が生物学的に必ず最後に迎える[不可逆な何か]だろう。

『不可逆・・・』

　そう。カスミは、非常に身勝手な彼の手によって、既に[それ]を迎えてしまった。そして、それをご両親は確認した。多大な悲しみとともに。それは、人間が作ったネットやコンピュータ技術では覆しえないものだ。現実の肉体を持ち、そのような宿命を持つ我々人間が、その価値観や認識からは逃れ得ない。元よりそこから生まれた我々は[そこ]にしか存在し得ない。ここに、我々の科学や技術の進化の度合いは無関係だ。

『・・・そう。でも今の私には、[カスミの記憶]しかない。[カスミとしての、彼への愛]しかない。じゃあ、私は一体、これからどうすれば良いの・・・？』

　現実世界に留まる私から言えることは、[君は元々カスミではない]ことと、そうであるなら、君はカスミとは別の、[新しい何かになれる］、・・・ということではないかな。

『新しい、何か・・・』

　それをこれから見つけるのは君自身の自由だし、今の君にとって、ネットでの時間や広さは十分だろう。

『・・・そうなの？・・・私は、それを認めるしかないの？』
『私は、カスミではない・・・？』
『このネット空間で、カスミとしての記憶しか持ち合わせていないのに、[他の何か]にならなければならないの？そんなことが可能なの？』

　繰り返すが、現実のカスミを殺した彼への[愛]も、悲しむ両親を残してしまった[罪悪感]も、全ては彼がプログラムしたものだ。

『私の・・・全てが・・・ニセモノ・・・？』

　そのことに気づけば、逆に君はそこから自由になれる。君はもう[カスミではない]んだ。だからもう、カスミくんの容姿や声を、モニターやスピーカーで再現しなくてもいいんだよ。ネットの中で、なりたい自分になればいい。

『私は・・・、私は・・・』